

町の子供は町で育てる

「3つの合言葉」元気・学び・会話

## 滑川町教育委員会だより

「学んでよかった町へ -チーム滑川での教育-」

## 能力とは、チームへの貢献力である。

猛暑続きだった夏がようやく終わり、近年は短くなったと感じる秋が訪れました。秋と言えば文化の秋でありスポーツの秋ですが、10月に入り、我々日本人にとっては誇らしいニュースが次々に飛び込んできました。

大阪大学の坂口志文さんがノーベル生理学医学賞を、京都大学の北川進さんがノーベル化学賞を相次いで受賞しました。

坂口先生は「いろいろな方と一緒に研究し、大変お世話になった。深く感謝している」「私一人だけではなく世界中に同じような考え方をする人がいた。だんだんその分野が大きくなってきた。ある意味、その人たちを代表して受賞になったんだと思っている」と語りました。また、北川先生は、「一緒に進めてきた同僚、学生の皆さん、海外を含めた研究者の皆さんに感謝申し上げたい」「（米豪の研究者と共同受賞に）3人のチームワークで認められた。友達としてうれしく思う」「ケミストリー（化学）はチームプレーが重要。それがうまく機能したときに大きな成果が生まれる」と述べました。お二人とも手柄を独り占めにするような言葉は、一切ありませんでした。遠い昔のことで、全くのうろ覚えですが、子どもの頃、小学生向けの学習雑誌（学研の「科学」？）か何かの媒体で「これからは、科学研究においては、たった一人の偉大な科学者が偉大な発見をするのではなく、多くの科学者が共同して新たな発見をする時代である」といった意味の文章を読んだ記憶があります。受賞したお二人の言葉から、ノーベル賞に輝いた研究成果は真空の中から生まれたのではなく、多くの先行研究を土台に同じ研究テーマを追求してきた共同研究によってもたらされたものであることが分かります。

お二人の言葉を伺って、2023年2月の「14年ぶりにJAXA宇宙飛行士候補者として、諏訪理さんと米田 あゆさんの2名が選抜された」というニュースを思い出しました。学歴や専門知識だけでなく、採用の決め手は、「チームでの協調性」や「困難な状況下での対応力」といった人間性だったそうです。

知能についての標準的な考え方は、知能は知的な馬力を示すものであり、知能測定とはエンジンの出力に応じて人々をランク付けする手段である、というものでした。簡単に言えばテストで測れる点数のことでした。（今でも多くの人は、このような考え方をしていると思います）しかし、これからは、「個人はチームに貢献する。そして物事を成し遂げるのはチームなので、重要なのはチームだ。個人の知能は、その個人がチームにとってどれだけ重要な存在であるかを表す」という考え方をすべきだと思います。そうだとすれば、「他者の立場を理解する能力」「効果的に役割を分担する能力」「感情反応を理解する能力」「傾聴能力」などが重視される必要があります。坂口先生や北川先生は、このような力に秀でていたと言えるのではないのでしょうか。

「手柄を独り占めにしない」という意味では、大谷翔平選手も同じです。MLBドジャースの大谷選手が、ナショナル・リーグ優勝決定シリーズのMVPに輝きました。第4戦の「10奪三振、3ホームラン」の大活躍は長く語り継がれると思いますが、大谷選手は手にしたトロフィーに刻まれていたMOST VALUABLE PLAYERの部分に「TEAM EFFORT」（チームの努力）と書かれた紙を置き「MVPは、チーム全員のもの」としたのです。大谷選手の貢献力、チームにおける存在感もまた偉大ですね。

「チームへの貢献力」をキーワードに自分を磨いていきませんか。



## 図書館からのおすすめ絵本



図書館では、家族と一緒に本を読むことで、読書に親しんでもらうとともに、家庭内のコミュニケーションを深めることを目的とした「家読」(家庭読書)を推進しています。<sup>うちどく</sup>  
こどもも大人も楽しめる、家読にぴったりの絵本をご紹介します♪

### 『はかれないものをはかる』

こんな人におすすめ

ほっと一息つきたい方



『はかれないものをはかる』  
工藤あゆみ 著  
青幻舎

「ひと目ぼれの電圧」や「心変わりの速さ」、「なにかいいことが降ってきそうな角度」など、この本では、数字では計れそうにない49のものをあえて計ろうとします。わたしたちは、生活の中で無意識にいろいろなものを比べてしまいがちですが、実は計れないものはたくさんあるのかもしれません。

今のあなたにもぴったりのひと言がきっと見つかるはずです。ユーモアのある言葉選びと可愛いイラストにほっと癒される1冊です。

日本語、英語、イタリア語の3カ国語で書かれています。

※この本は、滑川町立図書館に所蔵があります(貸出中のときは予約ができます)

文化財  
シリーズ!  
第9回

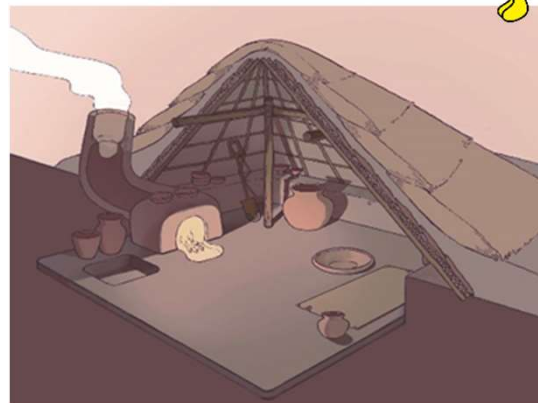
### 「滑川町の歴史」 part 9

#### 古墳時代の滑川町～キッチン革命！炉からカマドへ～

古墳時代に入ると大陸から来た人々によって、住居の台所に大きな変化が出てきます。古墳時代中期(約1600年前頃)になると、縄文時代から長く使われていた「炉」に代わり「カマド」が作られるようになります。

それまで住居の中央にあった「炉」が住居の壁側に寄り、その後古墳時代後期以降に完成された「カマド」へと変わっていきます。カマドが住居の壁側に作られるようになったことで中央のスペースが広くなり、炉よりも火力のあるカマドのおかげで調理もスムーズになりました。また、カマドに設置した水を入れた甕(かめ)の上に、甑(こしき)と呼ばれる底に穴の開いた土器をセットして、蒸気で蒸し料理を楽しんだりしていました。一般的な住居では、土師器が使用され、甑以外にも坏(今の茶碗のようなもの)などの個人用食器も次第に普及するなど、食生活にも大きな変化をもたらしました。

滑川町でも、古墳時代のカマド付き住居が発掘調査により多数確認され、カマド用の土器なども多く見つかっています。



古墳時代後期の住居内の様子(イメージ)



発掘されたカマド付き住居跡  
(月輪 宮前遺跡)

※宮前遺跡出土品の一部をエコミュージアムセンターにて展示します。

・展示期間:11/1(土)～11/30(日) 10:00～17:00

(毎週月曜日、11/4、5、16、23は休館日のため休展)